

破局へと向かう時代の公共性

ハンナ・アーレントの判断論からのアート・ベース・リサーチについての一考察

広島市立大学 国際学部 湯浅正恵

1 目的

ジョルジュ・バタイユは原子爆弾の「人間的な意味」について、1947年に次のように述べている。

文明化された各単体は（すなわち文明）は、いかなる感性的な考察よりも自分の事業（未来を確保するための事業）を優先させると公言してはばからないということだ。これは次のことを意味している。つまり、戦争のおぞましさと、一つの社会が未来を確保するのに必要だと判断している活動の一つの放棄とのあいだで選択をせまられたならば、社会は戦争の方を選ぶということである。（バタイユ, 1947=2015 : 22）

国家が「公共性」の名の下に、無差別に命を奪い、民族を抹殺しようとする事件は今日まで世界各地で絶え間なく続いている。「テロ」のニュースを日々目にする私たちは、どこかの国の「安心・安全」「財産保護」の政策として実行された、テロ以前の暴力と破壊について、どれほど認識しているだろうか。栗原彬(2000)は「ジェノサイドの政治」を「最大多数の最大幸福」を謳う近代の正統な嫡子であると述べている。そこには「平和と繁栄」のためになら、他国民の犠牲も自国民の犠牲も正当化する政治がある。私たちが社会や世界についての思考を停止し、判断を放棄もしくは宙づりにしている間に、政治は「公共性」を語りながら、破局へと突き進んでいるようにみえる。

ハンナ・アーレントは、アイヒマン裁判を契機に判断力についての考察を深めていく。裁判は、判断力の萎縮がアイヒマンを怪物としたことのみならず、世論がアイヒマンの行為を判断することを避けたことを明らかにする。そうした判断の萎縮や放棄が、人々から世界のリアリティーを奪い、盲目的従属を可能にし、全体主義を支える大衆を形成していくとアーレントは警告する。それでは私たちはいかに判断し、世界を有意味なものとして取り戻し、公共性を再建し、自由と平和へ向かう政治を実現することができるのだろうか。

2 方法

本報告では、『カント政治哲学講義録』などの幾つかの著作や彼女の思索の痕跡を辿る論考から、アーレントの未完の判断論の概略を提示する。さらにアーレントが考えるところの判断力の要件を列挙し、アート、そしてアート・ベース・リサーチの役割を考える。

3 結果・結論

アーレントは、カントの『判断力批判』を政治哲学的に解釈し、カントが判断の根底にあると考えた「共通感覚」に注目する。カントは、主観的に見える趣味判断の「他者への伝達可能性」を指摘し、誰にも理解されない趣味に人は満足する可能性はなく、その判断には必ず他者志向的な反省が介在するという。反省の基準となるのが、他のすべての人の立場にたつ「拡大された思考様式」と呼ばれる「共通感覚」である。「構想力」により没利害・没党派的に世界の出来事を現前化させ「共通感覚」を基準として判断する。そしてその判断を「現れの空間」で表現し、議論し、世界の意味と世界における自らの位置を、仲間と共に確認する。また責任を伴う判断は活動を導き、その活動は「現れの空間」で物語られる。伝達することができる範囲が広ければ広いほど、判断の価値は高まり、社交性を本質とする私たちの快も増大する。こうした開かれた公共性、「現れの空間」におけるアート、そしてアート・ベース・リサーチの判断への貢献は明らかであるように思える。

栗原彬, 2000, 『証言 水俣病』岩波新書.

Georges Bataille, 1947, A propos de recits d'habitants d'Hiroshima, Critique no. 8-9. (=2015, 酒井健訳『ヒロシマの人々の物語』景文館書店.